

THE JOURNAL OF
JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol. 6, No. 1.

1971

— 目 次 —

「くすり資料館」の創立を祝して	朝比奈 泰彦	1
加賀藩の秘薬	三浦 孝次	2
本草学の泰斗伊藤圭介翁	吉川 芳秋	4
飯沼慾斎先生について	嶋野 武	7
内藤くすりの博物館	清水 藤太郎	10
欧米の医薬系博物館を訪ねて	内藤 豊次	12
編集後記	木村 雄四郎	17

Contents (Vol. 6. No. 1)

Yasuhiko Asahina : Congraturation on foundation of "the Naito Museum of Pharmaceutical Science and Industry".
Kooji Miura : Secret Medicine of Kaga Clan.
Yoshiaki Yoshikawa : On the authority Harbalist, Dr. Keisuke Itoo.
Takeshi Shimano : On the Master Yokusai Iimuma.
Tootaro Shimizu : On the Naito Pharmaceutical Museum in Japan.
Toyoji Naito : Visiting of Medical and Pharmaceutical Museums in Europe and America.
Editor's Note

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌

J. His. Pharm.

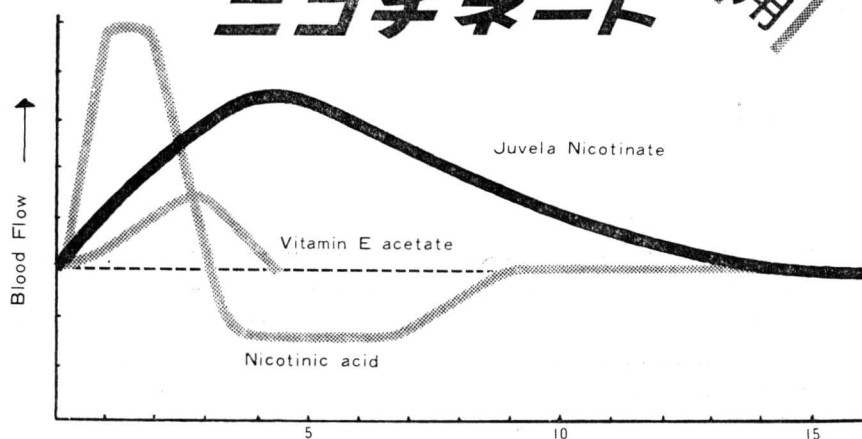
日本薬史学会

動脈硬化・高血圧症に

血行と脂質代謝を改善する

ユベラ ニコチネート

健康
増進
剤



持続的でリバウンドのない血流増加

作用と特長

ビタミンEの広範な作用の中から、とくに微小循環促進作用を強化した新誘導体（特許447937号）である。

従来の血管拡張剤、たとえばニコチン酸剤にみられる血流増加後の反発的な血流低下がなく、同時に血管を強化し、脂質代謝を改善するので、症状の改善により効果的である。

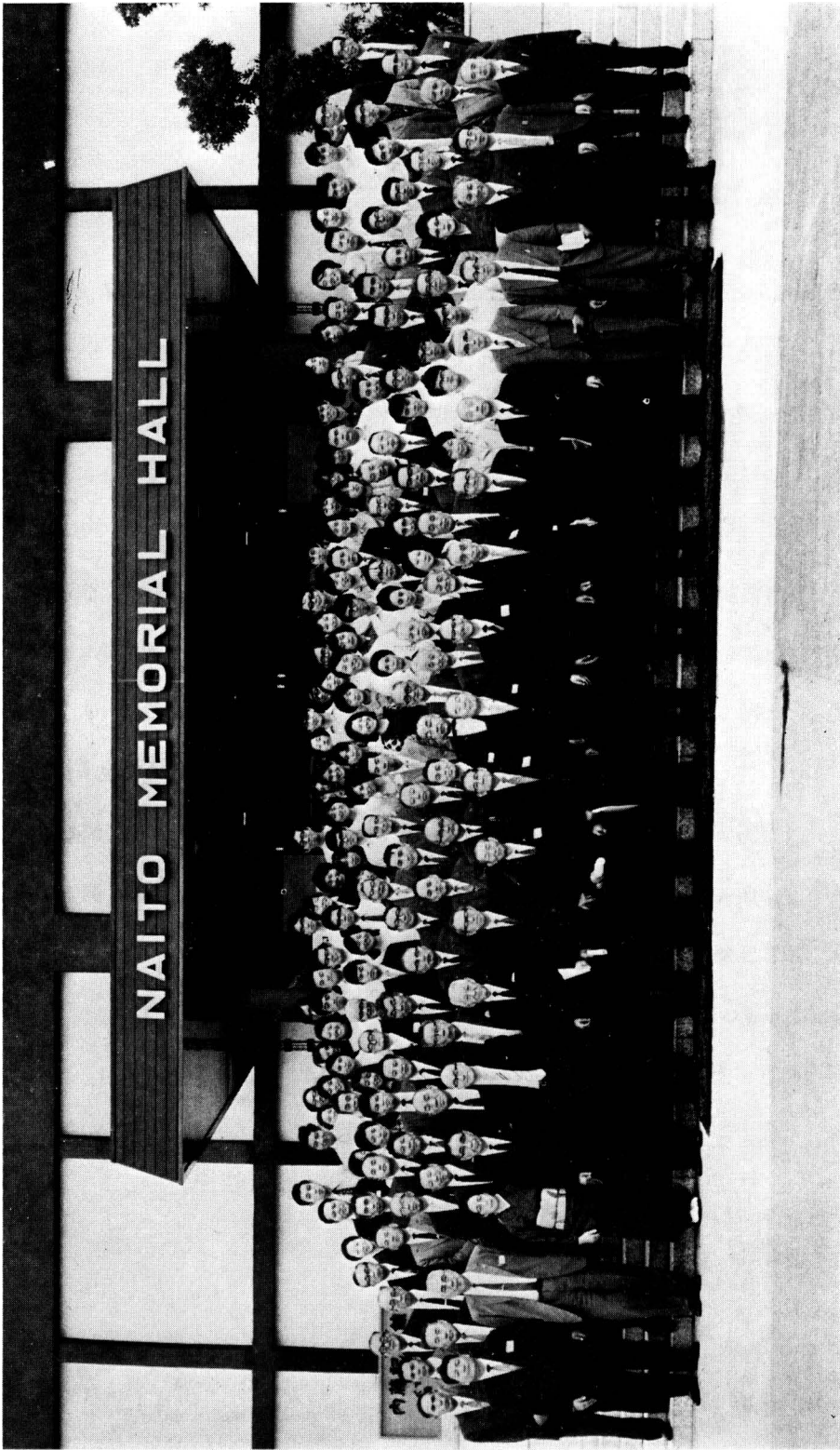
適 応 症

高血圧症、動脈硬化症、脳卒中、冠不全などの脂質代謝異常ならびに血行障害にもとづく諸症状（頭重、耳鳴、肩こり、しびれ感など）。



エーザイ株式会社

東京都文京区小石川4丁目 大阪・札幌・名古屋・福岡



日本薬史学会記念講演会記念撮影 (1971. 6. 13)

「くすり資料館」の創立を祝して

朝比奈 泰彦*

Yasuhiko Asahina: Congratulation on foundation of The Naito Museum of Pharmaceutical Science and Industry.

くすりに関する過去および現在の資史料を収集し、保管し、且つこれを供覧して将来への発展に寄与するための「くすり博物館」を設立することは、わが国においても従来ひとしく待望されたところであった。

今回、財団法人内藤記念科学振興財団理事長内藤豊次氏は内藤記念館の建設に当り、寄附行為として「くすり資料館」並びに薬用植物園を設置するため、わが日本薬史学会に協力を要請され、清水藤太郎、木村雄四郎、吉井千代田の三幹事は鋭意この企画に参加し得たことは、本会としても洵に時宜を得たものとしてご同慶に堪えない。

特に内藤理事長は自ら欧米各国の“くすり博物館”をはじめ関係諸施設を視察し、且つ国内各地のくすりに関する資史料を調査し、幸に大方各位の絶大なる協賛のもとに各地より門外不出の貴重な資史料の出品、展示することを得て、去る6月12日岐阜県川島町の内藤記念館において「くすり資料館」の開館記念式典を盛大に挙行し併せて翌13日日本薬史学会主催のもとに記念講演会を開催し得たことは、わが国における薬史学将来の発展に大きく寄与するものとして洵に慶祝に存ずる次第である。

* 日本薬史学会会長

President of "The Japanese Society of History of Pharmacy"

Present Address: 123. Totsuka 3 chome. Shinjuku-ku, Tokyo, Japan.

加 賀 藩 の 秘 薬

三 浦 孝 次*

Koji Miura : SECRET MEDICINE OF KAGA CLAN

At about the middle of the seventeenth Century (1670) in Ishikawa prefecture, Japan, Tsunanori Maeda (Showunko) 前田綱紀 (松雲公), a feudal lord of the Kaga clan, opened to the public a famous medicine which had been shut up as an exclusive privilege in the court of Maeda.

After that he allowed three court apothecaries in the city to prepare and market it. It is three most magical varieties (加賀三味薬) : Kiba-manbyoen (耆婆万病円), Usaen (烏犀円), and Shisetsu (紫雪). These consist of a large number of vegetables, animals and minerals which are of pharmacological deep interest to us.

The Author has been studying the pharmacological properties of this secret medicine of the Kaga clan.

加賀の風土と物産

石川県の能登加賀の2国は天平の頃(757年と823年との2回)に越前及び越中から分離統合されてつくられた。越中飛騨及び越前との境は高い山嶽によって閉ざされ、能登と加賀は日本海の荒海に囲まれ、ここに他国とは異った特異な文化が形成されてきた。天正11年(1585)前田利家が金沢城に入ってから明治にいたる約300年間加賀藩は100万石の雄藩として栄えてきた。ここでは奈良時代から多くの薬種が採取されていた。地黄・黄連・葛根・枳殻・茯苓・芍薬・山薬・榲子・桃仁等である。

金沢市の南にそびえる医王山(いおうぜん)はその名の示すように薬草の宝庫として有名である。又市の南郊に今日も地黄煎町があるがここでは古くから地黄のエキスが作られていた。黄連は白山々系が最もよい発育地で、極めて良質のものがとれる。葛は全県にいたるところに繁茂し、葛山のないところはない。特に宝達山は300年来葛根の産地で良質の「葛澱粉」が製造販売されてきた。又加賀能登を包む長い海岸線では様々な海産物が生産されてきた。ここは正に薬の宝庫である。

天正7年(1579)金沢の薬種老舗中屋の祖伊東彦左衛門祐久は山城から加賀に移住し医王山の麓戸室田原に住し混元丹を製した。1579年は恰も中国明の万暦18年で李時珍が「本草綱目」52巻を著した11年前に相当している。又中屋の同族磯部屋宗右衛門は顕如上人直伝の赤玉丸を製し、1656年には宮竹屋伊右衛門道喜

が、又1669年には福久屋景寿(かげなが)は薬種商を開業し、景寿は牛黄円を製した。その頃迄は薬種商は酒屋、米屋、旅人宿の兼業であったがようやく業種として独立し定着した。このような業界の機運にのるかのように寛文10年(1670)6月16日五代の藩主前田綱紀(松雲公)は前田家に伝わる秘薬3方を公開して福久屋・中屋宮竹屋に製造販売を許可した。このように17世紀の中頃までに加賀藩に於いて混元丹、赤玉丸、牛黄円、三味薬(万病円、烏犀円、紫雪)のような複雑難解な漢方薬が出現し、一般大衆の保健の為に用いられていたことは驚嘆に値するのである。その調製法の奇抜にして合理的なのは今日の科学の立場よりも驚くの外はない。想うにこの時代のヨーロッパは未だ化学の黎明期でヘルモント・グラウベル・クンケルの初期無機化学者の時代である。1661年にロバートボイルの「懐疑的化学者」が発刊され化学の独立が宣せられた。医薬はなお生薬製剤の時代で1660年英医タボールによってキナモキスが製られていた。加賀藩の秘薬の構成が如何に高度なものであったかを知るのである。

加 賀 三 味 薬

三味薬とは耆婆万病円、烏犀円、紫雪の三方で、三品は次示する如く動物性、植物性、礦物性薬材からなっており、処方構成が如何にも難解である。

註：表中()内は数を表はす、礦物性薬品()動物性薬品()植物性薬品()を意味する。

[I](耆婆万病円) 禹余粮・雄黄・朱砂(3)羌青・蜈蚣・牛黄・犀角・麝香・石蛭(6)黄芩・黄連・甘遂・乾薑・桔梗・芍药・芫花・細辛・芍药・紫

* 金沢大学名与教授, Adress : 2-2, Ishibiki, 3-chome Kanazawa-shi, Japan.

苑・川椒・前胡・桑白皮・大戟・葶藶・当歸・人蔘・肉桂・巴豆・茯苓・蒲黃・防風⁽²⁾。

〔Ⅱ〕(烏犀円)雄黄・辰砂・朱砂・膩粉⁽⁴⁾阿膠・烏鴉・烏蛇・狐肝・牛黄・虎骨・麝香・全蝎・蟬殼・桑螵蛸・白花蛇・敗龜・晚蚕蛾・白殭蚕・羚羊角・槐膠⁽⁷⁾藿香・何首烏・乾薑・枳殼・羌活・繫樓・藁本・厚朴・細辛・縮砂・川芎・石斛・川夏烏頭・葶藶・陳皮・沈香・丁香・天竺黄・天麻・天南星・当歸・独活・人蔘・肉豆蔻・肉桂・半白附子・白芷・白朮・檳榔・茯苓・附子・防風・蔓荆子・麻黄・木香・龍腦⁽⁸⁾。

〔Ⅲ〕(紫雪)黄金・寒水石・滑石・朱砂・磁石・硝石・石膏・朴硝⁽⁸⁾犀角・麝香・羚羊角・(3)甘草・玄参・升麻・青木龍・沈香・丁香⁽⁶⁾

右示したように万病円は動物薬6種、植物薬22種、磁物薬3種計31種の薬材からなっている。烏犀円は動植物薬58種から、紫雪は動植物薬17種からなり、明かに多味薬剤と云うことが出来る。又烏犀円は動物薬を主体としたもの、紫雪は磁物薬を主体とし、万病円は比較的植物薬を主体としてようである。この三味薬の効力については今日の薬物理解では到底立証し得ないであろう。しかしこれ等構成薬の薬理作用を明かにし、しかる後に綜合作用を検討することによって近代科学的究明を行うべきであると考えている。ともあれ之等秘薬は300年の長い年月の間、金沢の老舗の手によって原典が尊重され示された技法の一点一劃もゆるがせにせずして調製され、前田綱紀の委託にこたえてきたのである。

前田綱紀 人とその事業

前田綱紀(松雲公)は寛永20年(1642年)父光高の長子として生れ、幼にして父を失い、3才で加越能三州の太守となり、82歳逝去の日迄約79年の長年月、100万石の君主として善政をほどこし、加賀藩の光輝ある発展をもたらした。凡そ大名の中には和漢の学を修め、文科方面にすぐれた業績をのこした人は多くあるが、科学的方面に多彩な活躍をなし偉業をのこした人

は極めて少い。その意味でも公は異色の人である。公の行った文化事業による盛大は加賀藩全期を通じて頂点と云われている。日本の著名な学者は多く招かれた。木下順庵・室鳩巢・稻生若水等である。又古今の名著は加賀藩に集められ貴重な古文書は城内8棟の蔵に納められた「政治は一に加賀二に土佐」と又「加賀は天下の書府」と称せられた。公は科学的な著作としての一つに当時の百科辞典とも云われている「桑華字苑」がある。30才の頃より書き始め全巻実に100余冊からなっている。又「好祐類編」は公の本草に対する研究記録で桜・楓・何首烏・芥子・芸香・甘草等の薬について考証している。1682年にはレンベルチ・ドドナールのオランダ本草書を小判10両で購入、オランダ植物の研究をしている。又珍品としては公の編集「草木鳥獸図考」で少年の頃より集めた多くの腊葉からなっている。明治維新の際残念にもその大部分は失われ、今日その断片を残しているに過ぎない。公は稻生若水に命じて「庶物類纂」1000巻を著わさしめた。日本版本草綱目とも云えるものである。

公の本草に対する情熱ははげしいものがある。晩年には樟木より樟腦製造を実験した記録によれば家臣をして日向国へ造樟研究に行かした程である。公の樟腦製造は成功しなかったが「色々樟腦御とらせ被遊候得共埒明不申候」と書かれているように公は幾度かの実験の失敗にめげず、樟木の本質を捉えねばやまぬと云った科学精神実証精神に燃えていた。公の時代に加越能三州に医薬の業蔚然として振興し、各種の発明があったのは一つに公の研学の精神に帰すべきものであらう。

この巨人も享保4年(1719)82歳をもって歿した。しかし公の科学精神はながく伝わり、その後も医薬研究は目覚しい進展を見せた。明治の初年アドレナリンの発見をもって知られている高峰譲吉が、又日本薬学の創始者高橋順太郎が加賀武士の中から身を起して薬の研究に偉大な貢献をのこしたのも、公の科学精神の開花したものとしなければならない。

本草学の泰斗伊藤圭介翁

吉 川 芳 秋*

Yoshiaki Yoshikawa : On the authority Harbalist, Dr. Keisuke Itoo.

Keisuke Itoo (1803~1901) formed the phytology of the Owari school, under the leadership of Hōbun MIZUTAH, the founder of the Owari phytological school, with Yokusai IINUMA and took charge of its study and guidance. The sorts of medical plants, which he had collected throughout his life, from his young days, all over the country, were innumerable. Especially, the "Taihei Honzō Meiso (Taihei Phytological List)", which was published in 1829, is famous; this book is the translation from "Flora Japonica (Nippon shokubutsu-Shi)", edited by Thunberg, the leading disciple of Linné, and the original copy was presented to ITO by SIEBOLD, who stayed in Nagasaki at that time.

ITO's writings, manuscripts and research data amounted to so vast sum of volumes and copies, and they are now kept in the National Diet Library and also in the Higashiyama Botanical Garden in Nagoya, etc.

He immortalized his name as a botanist and phytologist.

伊藤圭介翁は、今から168年前の享和3年(1803)正月27日に、現在の名古屋市中区丸の内3丁目11番地で、町医西山玄道の第三子の次男として生れ、明治34年(1901)1月24日に、東京本郷区本妙寺坂上の真砂町14番地の自邸で亡くなられた。時に数え99才。その死因は兎肉を食べて腹をいため急性腸カタルといわれる。先年、吉川弘文館から出された九州大学教授杉本勲博士の人物叢書「伊藤圭介伝」には、圭介翁の絶筆として、死の直前に家人に支えられて揮毫された「我が心氷の如し」の墨書が巻頭にあって、如何にもこの巨人を伝え、かつ冷徹さと悲愴感さえ覚えさせるものがある。

翁は、戸籍面が4年ほどおくれでつけられていたともいわれ、大垣の飯沼慾斎より21才若く生れられたことになっているが、幕末の騒然たるときから生生発展の途上にあった輝かしい明治の代に及んでおよそ1世紀の間、西洋医学および蘭学徒として苦難を乗り越え風雪に耐え、或は本草物産の泰斗として、天然資源ないしは博物学など、維新草創期の学界に一大明星として不滅の偉功を樹てられたことは周知のとおりである。このたび、内藤くすり資料館の開館に協賛されて開かれる記念講演会が1世紀に亘る巨人として翁の事跡を採り上げられたことは、洵に意義深いものと存じ、まずもって関係者各位に敬意を捧げるものである。

御承知のように本草学は、不老長生をはかり薬物治療を目的とした今日の薬物学に相当するものであるが、中国の本草学を大成したのは実に李時珍でありその名著『本草綱目』52巻は、不滅の古典として今日に伝えられている。

日本の本草学は朝鮮を経てわが国へ将来され、わが国では一千有余年前に出版された『本草和名』18巻が、その最初といわれ、漢土の種類凡そ一千数十種に日本名を考定したものである。

しかし、わが国では徳川期の中世に京都の小野蘭山が日本的な本草学を樹立して以来、特にわが尾張地方ではその流れをくむ水谷豊文を中心とし、飯沼慾斎その他圭介翁など、いわゆる尾張学派の本草学を形成して、百数十年間独自の発達を遂げたことは特筆すべきものがある。

周知のように徳川期に入って、幕府の鎖国政策によって、本草学は、広汎な領域にまで及んだが、とりわけ、蘭人と交易することを長崎出島の地でのみ許し、当時海外知識の源泉であった和蘭書等の輸入も、わずかに医書、泰西本草の名のもとにこれを許したもので、それらがやがて明治維新開化のもととなり、新知識の導入となっていたものである。

すなわち、わが国の本草学発達の歴史は、明治維新以前の学術史、科学史を形成し、蘭学洋学史にもつらなり、名物、物産はもとより医学、生物学、博物学、民族学、考古学その他、言語、音楽など百般の学芸にかかわるものであった。

江戸の蘭学者であった宇田川榕庵が、翁に宛てた書簡中には「本草学は尾張の名古屋に止まり、何分お盛んの由お羨しく存じ候」と述べて、当時の盛況を歎称していることでもうかがわれよう。

尾張本草学の盟主、水谷豊文は天保4年(1833)3月に死去して亡き跡、圭介翁は東海地方における本草同好結社である嘗百社の中心的存在となって、同志の人たちの研究指導に当たられた。

この尾張嘗百社は、翁の実兄で尾張藩の医学総取締

* Address : 29. Awachyo, Higashi-ku Nagoya-shi, Japan.

りの任にあった医学館の塾頭大河内存真が、中国の炎帝神農が百草を嘗めて薬効の能毒を知ったという故事から採って名付けたもので、同志は互に和漢名の当否や効用などの研究をしたほか、広く山野を跋渉して博採精窮実験審視につとめ、毎月集会して互に研究討論し、薬品会、或は本草会などと称して藩の医学館とも携え、普く多くの人々にも見せたり、またその記録を広く印刷するなどした。今日これを産業、文化、学術上などからみても特色があり、その一端は「尾張名所図会」など当時の書物について知ることができる。

圭介翁は14・5才の頃から父兄や師の水谷豊文、その他の先輩や同志の嘗百社員の人たちと、尾張、三河伊勢、志摩、美濃、信濃の各地をはじめ、西は近畿、中国、九州各地から、東は関東一円にまで、山野を歩き、晩年なお90才ごろまで採葉に努めた。

特に翁が、今から113年前の安政5年(1858)2月に、名古屋袋町に旭園を開いて内外の多くの薬草を植え、また同園で同志と時々本草会や例会を開かれたが、現在その地は、名古屋テレビ塔の西数百米、亀末広という菓子舗のある地に当たり、去る43年に杉戸現名古屋市長ほか有志たちによって「きよくえんあと」の碑が建設された。

また同じ安政5年5月には、翁をはじめ嘗百社員15名の外、飯沼慾斎などの人々も加えて数日間、伊勢菰野山へ採葉をされた。当時の模様や採品の目録などが奉納様の2米程もある木板横額二面のうちにかかれて宿舎の杉屋主人におくられ、長く同楼上に掲げられてあって、戦前に市立名古屋図書館で翁の展覧会が開かれた際、名古屋製薬株式会社から出陳されたが、その際図書館で苦心して撮影せれた写真も、共に惜しくも戦災で焼失した。それには翁の手跡で、採葉品目365品の名称や同遊の氏名などが墨書きされ、同行の画家中野月嶠が着色して、当時の人々の採葉の模様を描写した誠に貴重な文化財であって、今日に遺存して当資料館にでも掲げることが出来たらと悔まれている。

また明治8年(1875)2月に、翁が博物局から出版せられた1枚刷り「草木乾腊法」は、有名な服部雪斎の画を入れた日本最初の植物乾腊法を述べたもので、今日では世上に余りみかけないが甚だ興味深いものである。

翁の名をわが学界に不朽ならしめたのは、今から142年前の文政12年(1829)10月、27才の時に名古屋で出版された「泰西本草名疏」付録共3冊の美濃判の本であるが、これはスウェーデンのリンネの高弟チュンペリの書いた「日本植物志」を反訳したもので、世界共

通の学術用語である学名とは如何なるものか、それを和名即ち日本名と対照して、併せてリンネの人工分類、即ち植物界を大別した24綱の解説を付したもので、わが国へ紹介した最初といわれる。雄蕊、雌蕊、種類などの学術用語は本書から始まり、特に表紙には、俗間実のならないといわれた糠棠の実と、咲かないといわれたイチヂクの花とを描出して、学理啓発に意を用いられている。

この書物に、稚井(わかい)八郎という人物が出ており、余程植物学に精通した人と思われるが、同書には「伊豆ノ産今死スト云」と記載されている。かつて牧野富太郎博士は、その事に触れて誰れであるかを解明したいと述べられたが、これは当時蘭医として日本に来て、我が国の科学、天産物、文物制度一般をも広く研究調査して、多くの名著述を出版し世界の学界に寄与したシーボルトの名をかくして表現したものと思われる。

シーボルトは、文政10年(1827)から翌年にかけて、和蘭カピタンが江戸将軍へ例参するのに随行して、熱田宮の宿を通り、その往復、名古屋本草家の水谷豊文や大河内存真、圭介翁らは出迎えて会見して、当時持参した動物鉱物等の標品を鑑定して貰い、色々と質問や意見を交換した。その帰途シーボルトは、圭介翁に対し、是非長崎へ来て共に天産物などの研究をするよう再三勧めた。翁は時に25才の青年であったが、両親が老令で容易に承知されず、兄の大河内存真の助けでようやく許しを得て、約半年間長崎出嶋のシーボルトの鳴滝塾へ赴かれた。しかし父兄からは再三帰国を促す便りが来て、やむなく辞して帰るに際して、別れを惜み、シーボルトから餞別にチュンペリの「日本植物志」を貰い、頭陀袋に入れて頸に掛け、途中採集しつつ帰られた。ところが或る夜旅宿で、枕もとにおいたこの書物を盗まれて、失望落胆されたが、翌朝近くの竹藪に捨ててあるのをみつけて、非常に喜ばれたという。すなわち帰宅の後ち本書をもとに、著述出版されたのがこの「泰西本草名疏」であった。

翁がシーボルトに熱田宮の宿で出会われた時、翁の師である水谷豊文が美濃国根尾山産の蓂蓉(はしりどころ)の標本を示してラテン名を質問し且つこれが目薬になる薬草として教えられたといわれる。シーボルトが東行したのち江戸の旅宿で、將軍の侍医土生玄碩から眼科の秘薬につき教えを乞うた際、その代償に玄碩が着用した葵紋の外套を要望され、玄碩はやむなく死を決してこれを与えて教えを受け、秘薬を入手することが出来た。この時、シーボルトはただ「宮」「宮」

とだけ言い、百方捜査して尾張本草家達ちの助力を得て遂に目的を達した。当時將軍から拝領の葵紋の時服を外人に与えることは、死罪をもって厳禁されていたが、万民を救うためよし自分は死罪となっても予め其の術を子の玄昌に伝えておけばと遂に決断したということである。

偶々シーボルトが帰国するとき、暴風雨のためその乗船が長崎港外で難破して、禁制の品々が露見して、いわゆるシーボルト事件が起きて玄碩も入牢することになった。たまたま、將軍が痲瘡を患い重き眼病となり、玄碩を召し出して治療し、その甲斐あって將軍は全快したので爾來玄碩は罰を免れたといわれる、隠れた尾張本草家の功というべきであろう。

この外、翁が今から130年以前の天保12年(1841)に、わが国で始めて西医ジェンナーの種牛痘法を紹介した「咲啖咽国種痘奇書」を名古屋で出版し、医家として同志の人々と種痘やコレラの衛生予防に努め、また明治初年には、医育機関の設置を藩に申立て、それが今日の名古屋大学にまで発展する基礎となった。

翁の著作は膨大な稿本資料、実に1万冊以上にも上り、今日国立国会図書館を始め、名古屋市東山植物園など、東西各地に分散しているが特に明治初年に文部省で発行した「日本産物志」11冊があり、全国各地の凡ゆる産物を広く記述すべくして惜しくも完成するにいたらなかったが、今日、日本産物史上からみても非常に貴重な労作であり、また『東京学士会院雑誌』に、80才から93才まで十有余年間連載された「花史雜記」の論考は、学問上貴重な文献である。

翁は明治3年(1870)12月、大学出仕を仰せつけられ68才で名古屋から上京し、明治12年3月77才で、東京学士会院会員に選ばれ、学位令が制定され86才で、理学博士第1号となられた。

植物学界の宝といわれた故牧野富太郎博士も明治14年20才で初めて上京されて、当時79才の圭介翁に会い、翁に頼んで書斎の横額の書や、竹と梅の画を書いて貰い、その翌年には翁の「蕃椒図説」という書物をおくられたと語られた。

私はたまたま先年、牧野博士が翁に宛てた土佐国高岡郡佐川村西町24番地から差し出した明治16年7月11日付け墨書きのハガキでいろいろと植物について尋ねられていることを知って、生前同博士から直接に私宛のハガキには、『強いて言えば私は圭介翁の高弟小塩五郎にタッター一度だけ禾本科植物のウキシバについて教えを受けたことがある』といわれて、翁については何も語られていないが、これらからすると同博士も尾

張学派の門流ということになると思われる。かつて、牧野博士は私が本草学の打ちとめであろうと言われた、先生が、往時の尾張学派の本草学の盛時を回想されて、是非ともこれら先達の人々に負けないよう後進の者の奮起を要望されたことがある。

先生によって今日ケiskeイ、或はケiskeアナなどと世界共通の学名を草木などにつけられたものが20種近くを数えることができる。

かつて、福沢諭吉は翁の100才記念にその著書を出版するよう企画されたことがあったが、その前年の99才の死によって遂に実現されなかったことは、真にわが学界のため千載の恨事であった。

明治32年(1899)翁が97才のとき、博文館が創業12周年に、当時広く日本の各層、政治、文学、美術、法律、教育、科学、医学、宗教、軍事、農業、工業、商業、各界から12傑を投票で募ったことがあり、翁は科学界を代表して選ばれ、その伝記が雑誌「太陽」の増刊号として発刊されたことがあった。

日本の医学界の大御所として知られた名古屋大学総長の故勝沼精蔵博士は、生前翁を尊敬され、30年近くもその顕彰をつづけられて、今から14年前に、若い青少年の科学教育の手本に、東京芸術大学山本豊市教授制作の、翁の慈顔の座像を名古屋市の鶴舞公園の一角に建てて多年の念願を果たされたが、これには愛知県下の小中学生など50有余万人から寄せられた贈金200有余万円で実現したものであることは、全国に類例のないことで誇りとするものである。

なお、翁に就ては、父や、兄、姉が孰も8,90才という稀にみる長寿者で、しかも同胞愛が強かったこと、絵画、詩文、書などにもすぐれ、何百という多くの傑作が今日に残されて、家訓、処生訓についてもなお語るべきことは多いのである。

圭介翁の死に際して特に男爵を授けられ、葬儀には一カ中隊の儀仗兵を差し遣わされたことは、独り伊藤家の榮譽のみならず、尾張本草学はもとより、我が学界の永く誇りとすべきことであった。

なお、余事乍ら戦前翁の孫の伊藤秀雄農学士は大正14年から岐阜高等農林学校教授となり、胸を病んで退官されて昭和8年2月、47才の若さで当地で亡くなられたが、その病床には、圭介翁を尊敬された勝沼博士が名古屋から往診し治療に当られたと、生前の勝沼博士から直接に伺ったことがあり、その奇縁に驚かされたが、名古屋市東山植物園の水野前園長は、伊藤農学士の教え子で、翁の資料の一部が同園に所有されて伝えられているのも、まことに奇縁と思われる。

飯沼慾斎先生について

嶋 野 武*

Takeshi Shimano : On the Master Yokusai Iinuma.

The eminent herbalist yokusai Iinuma (1782~1865) is also pioneer of medicinal plants in Japan, and learned old Dutch medical Science from Shinsai Udagawa and his son Yoan Udagawa. While started medical practice at Ogaki in Gifu, collected Various plants for study. He built a small villa named "Heirinso" at Nagamatsu near Ogaki and described about his collection of herbs with many illustrations. Since 1856, he published "Somoku Zusetsu" (20 vols), the first book of botany in Japan, following the Linné's classification. Recently his manuscripts (27 vols) were discovered in Mieji near Ogaki.

生 い 立 ち

天明2年(1782)6月10日三重県鈴鹿郡龜山の豪家西村新左衛門(正しくは信左衛門だという)の次男として生れた。幼名本平, 長じて専吾。

12才のとき故郷を去り, 叔父美濃大垣竹嶋町の飯沼長意に赴き, 長意の斡旋で俵町の長意の弟である医師飯沼長頭(初代飯沼龍夫)に身を寄せた。18才ごろ京都に出て医師福井丹波守について医術を学び, 業終えて美濃に戻り, 長頭の長女阿志保と結ばれて嗣子となり飯沼姓を継ぎ医業に従い, 名を長順と改め二世飯沼龍夫となる。

蘭方を学ぶ

垂井の友人吉安三栄は蘭方が漢方に勝ることを説いていた。それによったのであろう江馬蘭斎(小野蘭山の門人)の門人吉川琳安について蘭方を学び始める。

28才妻子を近親に託し, 家財を売って(書籍講を起したりした)学資を作り, 江戸に出て, 津山藩医宇田川榛斎の門に入った。榛斎はその志に感じたが, 自分は医務と翻訳に寸暇を得ないため嗣子榕庵および高弟藤井芳亭について学ばせた。慾斎は毎日鍛冶橋の榛斎宅から下谷の芳亭宅まで里余の間を往復して勉学すること3年, この間浅草観音にも足を入れなかったという勉学一途であった。

業を終えて美濃に飯り, 蘭方医として再び開業した。「至誠居其業」を掲げ, 医業大いに繁昌した。

本草学との関係

* 岐阜薬科大学学長

Adress : 3-14, Kumoicho, Gifu-Shi.

若くして本草学に関心深く, 寛政10年(1798)(16才のとき)には小野蘭山が採薬の途次(幕命でなく, 個人的のものらしい。文化元年(1804)9月28日舟にて濃州大垣に至ると日記にあるのが幕命によるものである)を自宅に迎えて, 師弟の約を結び採薬に随行してその学識見聞を大いに広めた。(蘭山との師弟関係は慾斎が京都に出てから始まったのではないかと白井光太郎博士はいう。)蘭山没後は名古屋の本草学者水谷豊文の指導を受け, 美濃にあって医業の傍ら本草研究者としても著名になる。

平林荘にこもる

天保4年(1833)52才のとき医業を夫人の弟健介(長頭の次男, 長栄, 三世飯沼龍夫)に譲り, 大垣城西長松(現在大垣市内, 国鉄垂井線の分岐点近く)に平林荘を建て隠居する。君慾斎(器用で何んでもできたから慾ばりの意味でつけたのであろうといわれる。)ほとんど客を絶ち閉居し一意専心植物研究に打ち込み, 10年の年月をかけて草木図説30巻を作った。平林荘が落成したとき, 頼山陽門下で能文の後藤春草(名は機, 号松陰)が平林荘記を作った。('三重県植物誌'下巻に全文がある)

慾斎の死

慶応元年(1865)5月5日84才で逝去, 法名徳量院釈道全信士。墓は大市本町縁覚寺内の墓地にある。墓碑は明治31年墓地整理で取除かれ, 単に飯沼氏先祖代之墓と記された墓碑下に合祀されている。

明治32年(1899)3月有志により先生顕称の碑が, 大垣公園内に建てられた。戸田伯爵(旧大垣藩主)が

篆し、伊藤圭介が文を撰したとある。明治42年9月贈従四位。

膳 業

大部分大正4年(1915)11月東京帝室博物館に納入されたが、関東大震災で烏有に飯したといわれ、その後国立科学博物館、大垣中学校等へ子孫から一部寄贈され、飯沼家には現在ほとんど保存されていない。

肖像写真

増訂草木図説第一輯巻頭に掲げられた肖像写真は、写真術が伝わった時代、長男百蔵等が蘭書により研究撮影したもので、愋斎76才ごろのものと記されるが、七代竜夫飯沼守一は、これは愋斎肖像ではなく百蔵の写真であるという。愋斎の写真は「三重県植物誌」下巻、および濃飛偉人伝にある。

平 林 荘

牧野富太郎博士は、明治30年ごろ草木図説の増訂に従われて平林荘を訪ねられたのを回顧して、「平林荘は愋斎の別荘の名で、大垣城を西に距る一里許りの長松村にある。愋斎50才のとき医業を継嗣に譲り、長松村の地を相して別業を営み、学問所、花園等を設け、客を絶ち専心一意実地に諸種の草木を研究し、独力を以て「草木図説」の編著に従事した。「平林荘」の扁額が門に掲げられた。そこを訪ねたとき、ちょうど愋斎遺愛樹のトウツバキが開花していたので早速にこれを写生して、その記念図をその後出版した「新撰日本植物図説」に掲げたことがあると

昭和5～6年ごろには相等荒廃し、所有も飯沼家から戸田家の手に移ったが、なお往年愋斎が各地から採集移植したものの中、ハナノキ、フウ、テンダイウヤクその他が相当残っていたという。

平林荘の土地は、往古の磐の址で、1521坪であったが、その後前記の戸田氏から、江川、富山両氏へ363坪を分け、残り1158坪が昭和24年日野氏の所有となった。

愋斎使用当時の木造建物は、相当腐朽していたところへ、昭和19年12月の地震で大破したので取り壊され、日野氏によりその跡に建物が新築されたので、建物については当時を偲ぶことはできなくなった。

旧建物は6畳2室、外側は廻り廊下となっていた由であり、現在ある杣石は元のまままだという。近隣の人は御殿と呼んでいたそうで、庭内には老木奇樹が生い繁っていたのであるが、終戦後老樹等は切り倒され、昭和24年にはカン、ゲッケイジュ、ドウダンツツジ、ミツバツツジ等60有余種の草木が雑然と繁る状態にあった。

地所は比較的低湿で、園内には月見の丘が築かれ、中

央に泉石やあずまやがあったのであるが、日野氏により天理教本真分教会が設けられ、さらに最近の増築等により大分面影が失われたわけである。しかし入口の門や垣には盛時を偲ばせるものがある。西北隅には厄けの祭神、知立神社、水神、稻荷等の四社を祭る古い除社殿があり、その前方には池がある。昔にはいろいろの鳥もおりたち、松茸も自然に叢生したという。

愋斎在世中は平林荘裏地続きに、養母の生家があり、愋斎の娘き伊がその当主吉田登内の妻となっていたという。

愋斎がよく採集に出かけた伊吹山は西北へ8km、養老へ南西6km、多度、菰野の山々も近くに見える。国鉄垂井駅は西2kmである。

愋斎は足が悪かったので、伊吹山採集のときなどよく駕籠に乗っていったという。

「草木図説」の概要

草部(前編)20巻、木部(後編)10巻、禾本、莎草、無花部および草部補遺等10巻、合計40巻を作る予定であったらしいが、草部の著述を終え(嘉永5年(1852)3月)ついで木部の稿がなろうとして物故され、完成を見なかったのは残念であるが、岩崎濯園の「本草図譜」92巻と並んで、日本の植物分類学上に誇り得る著作である。

はじめ草部5巻が安政3年(1856)に出版されてから6年の間に4回に分け20巻が出版され、世に行われた。「草木図説前編」標題のある黒表紙の本である。

愋斎没後嗣子長栄も没したため、久しく絶版の形となった。後田中芳男(伊藤圭介高弟)小野職磐(蘭山曾孫)が若干の校訂を加え黄色表紙の「新訂草木図説」と題して明治7年再版し、明治40年～大正2年に牧野富太郎博士により「増訂草木図説」(洋本、4冊)が出版された。

初版出版後も、愋斎は常に訂正を怠らず、版本の処々に訂正文が貼付してあるのが認められる。

木部10巻は出版に至らず、稿本は上野図書館所蔵という。田中芳男は緒言に官に納めたから遠からず上梓されるだろうと述べている。

図説上梓に至る模様は、「草木図説前編」に見られる。泰西植物学はリンネの学則により Houttyn が著述をなしてから大いに備った(「草木図説」はこれに拠ったものである)。日本では宇田川榕庵が「植物啓原」を祖述し、伊藤圭介は「泰西本草名疏」を著して日本における泰西植物学を樹立した功は偉大であると先人を称揚し、続いて本書著述上のことを述べ、顕微鏡を使用したこと、あるいは参考の図書10数部であったこと、古

稀の賀箋にその草稿を子弟に示したことが記してある。

山本亡羊の「草木図説前編」序によると、窓斎は亡羊に植物の疑義を正し、歳末には謝礼を送ったことが判る。文中窓斎蛮語を誦し夷情に通じてこの書をなしたと述べているが、伊藤篤太郎博士（圭介の孫）によると、初代竜夫三男飯沼良吉が、長崎の吉雄塾に起居、圭介とはシーボルト門下として知友であったが、頗る蘭文和訳に長じ、窓斎の図説編集の際は、引証の蘭書中難解の時には良吉の補助を受けことが多かったと圭介翁がら聞いたという。

また伊藤圭介の序によると、安政5年に尾張菅百社員一同窓斎の喜寿を祝い、窓斎とともに伊勢の菰野山に数日滞在して山野採集、一行中圭介はもちろん、窓斎が指教を受けた吉田平九郎、田中芳男ら尾張、美濃、伊勢の本草家が参集して盛大であったという。吉田の名は図説中雀巢庵として記されている。

なお、図説の図はすべて自身に写生したものである。図説に入れる木版図の板下も悉く自ら描いた。他人に描かすと、とすると誤りが生ずるのを案じたからであるという。顕微鏡も洋書中のものを参考にして、名古屋の鋳り職に作らせたものである。

遺稿の発見

窓斎の原稿27巻が、昭和32年大垣市文化審議会により江崎美奈子宅（岐阜県本巣郡巣南町美江寺、祖母が飯沼家出）で発見された。稿本中に収載の植物点数は1622、この中359が「草木図説」20巻中に収められていないものでイネ科、カヤツリグサ科、シダ植物が大部分であり、記載は刊行されたものと同形式である。現在栽培困難と思われるようなものも植栽されていたことが認められる。

稿本は美濃紙二枚折の和綴本、一冊大体70枚、右半面に写生図を記入採色してから二つ折としたものらしい。後半面には別的美濃紙をはりつけるか、または直接に、その植物について、採集地、渡来植物ならばその渡来国か渡来船の国名、一般に多く産する地域を書き、次に形態を記し、外国書等により植物名を定め、ラテン語による学名およびオランダ名が記されてあり、参考書にないものはその旨が記入してある。

産地については窓斎自身採集したものは「○○にて得る」となっており、再三採集されたものは「○○産」としたものとと思われる。他人により採集された場合は「其は××にて得る」として区別が明らかであるからである。勢、江、濃、尾、加（白山）信、越におよぶ産地が認められ、伊吹、養老、菰野等の近隣の草木が最も多く採用されている。

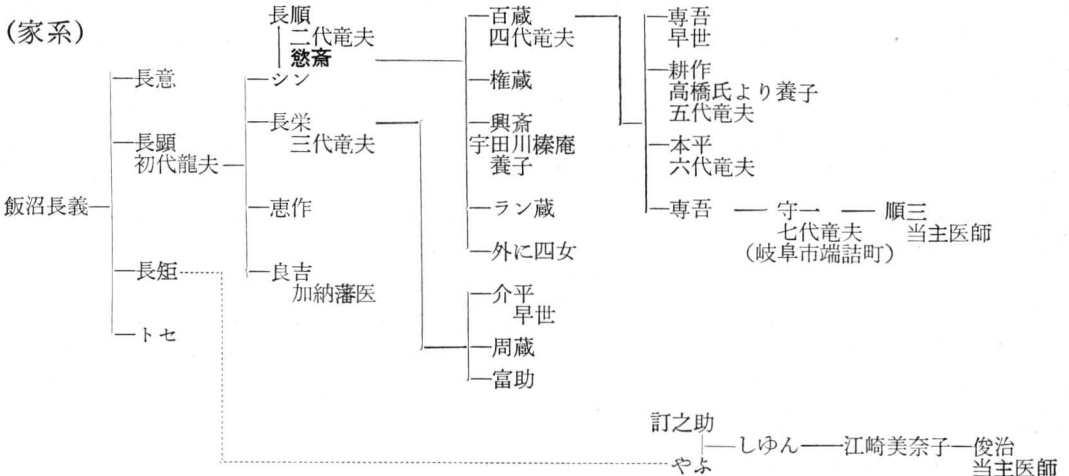
採集年の明らかなものは、草木図説に記載されていないものの中3種で、ショウキランとジャクジョウソウは伊勢菰野で安政5年（1858）76才のとき、ホソバノヒカゲノカズラ（正しくは）タカネヒカゲノカズラは白山で、弘化2年（1845）63才のとき採集したものである。

その他の著書

晩年は植物を専らとしたが、若年の時代は動物をも研究されたことが魚譜、虫譜等のあることから察せられる。

南勢海藻図譜1冊42枚、南勢菌譜6冊142枚、南海魚譜4冊95枚、禽部及び獣部1冊51枚、魚部1冊31枚、虫部及び介部1冊30枚など南勢の産品について主として記述されている。

以上の記文は吉川芳秋氏「尾張藩医科学史攷」に負うところが多いことを記して感謝の意を表する。



内藤くすりの博物館

清水 藤太郎*

Tootaro Simizu : ON THE NAITO PHARMACEUTICAL MUSEUM IN JAPAN

The Naito Pharmacy Museum was established June 12, 1971, in EISAI INDUSTRIAL GARDEN, Kawashima, Gifu-ken, about 30 km north from Nagoya City. This first museum of pharmacy in Japan was founded by Mr. TOYOJI NAITO, former president of EISAI PHARMACEUTICAL COMPANY, Tokyo.

わが国最初のくすりの博物館が、名古屋の北、約30キロ、岐阜県羽島郡川島町のエーザイ工園内、内藤記念館内に設立され、去る1971年6月12日、「内藤記念くすり資料館“The Naito Pharmaceutical Museum”」の名で開館式が行なわれた。この地は、東海道線、尾張一宮駅からバスで川島中学校前下車、徒歩7分、東京から新幹線で名古屋へ2時間、ここからタクシーで約40分、大阪からは2時間で到達する。内藤記念館は、飛騨の白川郷に残された合掌作りの三角形の民家を模して建築した鉄筋コンクリート6階建の家屋で1、2階は大講堂と小会議室で、くすりの資料は主として3、4、5階に陳列してある。なお約6000 m²余の薬用植物園が付属している。

この博物館は、くすりに関する資料を調査研究、教育するための展示を主とするもので、国際博物館会議 International Council of Museums (ICOM) によると、博物館は「文化的、学術的意義の深い資料を収集し、これらを研究、教育及び楽しみのために保管し、展示する常設機関はすべて博物館とみなす」と定義している。日本の博物館法によれば「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学などに関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮のもとに、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーションなどに資するため必要な事業を行ない、あわせてこれらの資料に関する調査研究することを目的とする機関」とある。要するに博物館は、収集、保管するだけでなく、それらを展示し、番人と説明者を必要とするのである。

わが国では、明治4年、文部省博物館で初めて Museum を「博物館」と訳し、明治5年、(1872)、文京区湯島聖堂の大成殿に博物館を設立し、美術、歴史、博物を収集した。その後、各地に都道府県立及び私立

の博物館が50館もあり、科学博物館と称するものも多いが「くすり」を標榜するものはない。数年前、個人的に、東京文京区に大槻彰氏の収集があり、また愛知県新城市に、三原薬局大原紋三郎氏の「大原薬業資料館」があり、各薬科大学及び古い製薬会社には、教育及びび善の目的で、多少とも薬に関する収集品が展示されているが、一般には公開していない。

博物館は、英語、ドイツ語で Museum、フランス語で Musée という。この語はギリシャ神話の最高の神、ゼウス Zeus (Jupiter) と女神 Mnemosyne の間に生れた美しい9人の女神、いわゆるミューズ mousa(英語 muse) に奉仕するアテネにある殿堂の名で、ギリシャ語 mouseion、ラテン語 Museum という。ミューズは音楽、美術、悲劇、喜劇、恋愛や天文などを担当する女神であって、この殿堂は、女神を礼拝するだけでなく、図書館や宝物の倉庫でもあり、知識と愛の殿堂であった。

紀元前280年、エジプト王 Ptolemy がエジプトのアレキサンドリアに博物館を設け、museum と名づけた。この博物館には、彫像、供物、天文器械、外科器械、象牙や希有動物の皮などの天産物を収集した、研究所もあって、神話から、地理、哲学、動物学、宗教から医学に及んでいる。

その後のヨーロッパは、いわゆる暗黒時代であって、この種のものはほとんど発達を見なかったが、ようやく15世紀、ルネサンス時代となって、古典的遺物を賞美し、その獲得と保存について熱心な要求があらわれ、これらの収集を記述する場所を Museum というようになった。

古い博物館は、多くは博物学者の私的収集物で、薬学関係で最も古いものは、スペインの Seville の Nicholas Monardes (?-1578) がアメリカ大陸から輸入したもの、及びドイツの Valerius Cordus (1515-1544) 及び Andrea Cesalpini (1519-1603) の植物標本があ

* 東邦大学名誉教授, Address : 5-781 Aioicho, Naka-ku, Yokohama-shi, 231, Japan.

り、昔の公設博物館の最も珍らしいものには、くすり関係のものが多く、一角獣の歯牙の一角は多くの博物館にあり、薬用のミイラも評判になり、薬局用具の美術的マジョルカ焼の薬壺や乳鉢などが多数に収集され、17世紀には、薬店や製薬室全体が復原され保存されるようになった。

その後欧米では、各地において各種の博物館が発達したが、19世紀において薬学の歴史的興味が増大して、この20世紀にかけて薬史学的博物館が各地に設立されるようになった。今くすりに関する収集物を展示している博物館は、George Griffenhagen : PHARMACY MUSEUM, 1956 によると、フランス38、ドイツ12、ハンガリー11、イギリス9、ベルギー、オランダ8、オーストリア6、デンマーク5、ユーゴスラビア、スペイン、スイス4、ノルウェー3、チェコスロバキア、ルーマニア、スウェーデン2、その他1カ所ずつで21カ国に124カ所の博物館があり、アメリカ合衆国には、25州に55カ所がある。くすりに関する独立したものもあるが、科学や医学と併置されたものもあり、1970年、エーザイの内藤豊次氏は欧米の15カ所の

くすり博物館を見学している。6月12日、内藤くすり資料館の開館式に招待した Dr. Hamarneh 氏は、アメリカ最大の国立博物館、ワシントン市のスミソニアン博物館 Smithsonian Institute の医薬部長で、この博物館は1846年の創立で、古くから医学、薬学に関する資料が収集され、1883年からアメリカ薬剤師会の収集品も委託されている。6月12日、くすり資料館の開館式及び13日の日本薬史学会講演会には約50ページ以上にわたる講演記録 Dr. Sami K. Hamarneh : Temples of the Muses and a History of Pharmacy Museum. Prepared for the opening ceremony of the Naito Museum of Pharmaceutical Science and Industry (The first public museum of pharmacy in Japan). June 12, 1971. を残している。

今年の万国薬史学会の国際会議 CONGRESSUS INTERNATIONALIS HISTORIAE PHARMACIAE PRAGAE, 20.-25. Septembris 1971. はチェコスロバキアのプラハで開られる。清水が本会を代表して出席する予定である。

Establ. 1870

HEIANDOO PHARMACY

5-78 Aioityoo, Nakaku, Yokohama, Japan.

Tel. Yokohama : 045-681-3232 ; 3233.

Dr. TOOTAROO SIMIZU, Pharmacist.

Professor of Pharmacy TOHO UNIVERCITY, Tokyo

Member of THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY, Tokyo.

Member of L'ACADEMIE INTERNATIONALE D'HISTOIRE DE LA PHARMACIE. Pays Bas.

Member of Internationale Gesellschaft für Geschichte der Pharmazie e. V., Stuttgart.

Member of the American Institute of the History of Pharmacy, Madison.

HUZIO SIMIZU, Chief Pharmacist.

創業明治3年

平安堂薬局

横浜市中区相生町5-78 (馬車道)

電話 (045)-681-3232, 3233

東邦大学教授	薬学博士	清水 藤太郎
薬局長	薬剤師	清水 不二夫

欧米の医薬系博物館を訪ねて

内 藤 豊 次*

Toyaji Naito : On the Visiting of Medical and Pharmaceutical Museums in Europe and America.

For two months, from September to November 1969, I visited several museums dealing with the health sciences in Europe and the United States and this visit gave me the opportunity of collecting much useful information. Also the added advantage of discussions with the curators of these museums, whose knowledge and experience were freely shared with me, have been immensely helpful in bringing to matrialization "The Naito Museum of Pharmaceutical Science and Industry".

昭和44年の9月下旬から約2か月間にわたり欧米各国の医薬系博物館を歴訪した。実は日本に於けるくすりに関する古くからの資料や図書を一堂にまとめて薬学や薬業関係者に伝える施設を当財団の公益事業の一つとして計画したのであるが、何分にもまだ日本ではそれに類するものがない。しかし欧米ではどの国でも一ないし数カ所は持っていることを知ったので、その主なるものを視察して当財団で新設するものの参考としたいためからであった。

まず清水藤太郎博士の紹介を得て、オランダ、ドイツ、アメリカ、フランス等の薬史学会と連絡し、いろいろのアドバイスを得た。これらの学会から「ぜひここだけは見ておきなさい」と奨められた医薬系博物館のリストは、とても2か月の旅程では見切れる数ではなかった。そこでこれらの資料にもとづき、日本薬史学会の清水藤太郎博士、木村雄二郎博士、それに吉井千代田氏等に相談して訪問先を選定し、何とか2か月間の旅程に収まるようにした。その結果、スウェーデンやデンマークなどの北欧諸国、イタリアやギリシャなどの地中海諸国、中南米などは、医薬系博物館からぜひ来て欲しい、との招待状が来たにもかかわらず、日程に組み入れることができず、次の機会に譲った。9月中旬に東京、羽田空港を出発し、まずモスクワを経由し、イギリス、オランダ、スペイン、スイス、ドイツ、フランスを視てアメリカに渡り、ニューヨークから西部海岸に向けてアメリカ大陸を横断することにした。9月下旬のモスクワは秋が深く、美しい紅葉の季節であったが、この紅葉を追うように南下して各国を

回わり、2か月間どの国でも「秋」を追いかけながら旅をした。以下はその主なるものの所見である。

I イギリス The Wellcome Institute of the History of Medicine

館長のC. A. Sizer氏の案内で見て回った。ウエルカム財団(The Wellcome Trust)の下に、The Wellcome Historical Medical Museum and Libraryと研究助成部門と、製薬会社Barroughth Wellcomeがあり、更にこのBarroughth Wellcomeの中にThe Museum of Pharmaceutical Scienceがある。Euston RoadにあるThe Wellcome Historical Medical Museum and Libraryは、創設者Sir Henry Wellcomeが趣味として集めたものに、さらに順次買い足したは寄附を受けて現在約5万点の史料を持っている。現在の建物ではとてもこの5万点の史料を収納できないので、郊外に倉庫を建てて保存し、このビルにはその一部が展示されている。

私達が訪ずれたときは「第一次大戦時に軍隊で使われた医療用具」という特別展示をしていたが、展示場のうちの3/5に特別テーマを展示し、3か月ごとにテーマをかえて陳列している。残り2/5の展示場は、ほとんど普遍的なもので、同一系統のものを5年間展示する。もちろんこの間に、同系統のもので更によいものがあれば入れ替える。

ウエルカム財団という財団の下部組織として、医薬博物館があり、研究助成をする財団の経費によって博物館が経営されている。特に注目すべきは、付属のライブラリーで、約25万冊の雑誌、1万部の文献類、10万点の医薬に関する文書や手紙が保存されており、研

* 内藤記念科学振興財団理事長, Adress : 10-6, Koishigawa 4 chyome Bunkyo-ku, Tokyo.

究者に利用の便を与えているが、特に薬学、医学の歴史を示す印刷物を数多く出版し、安い値段で研究者に提供している。また英国人だけでなく、世界各国の学者がこの出版局の編集陣に参加している。

一般には公開されないが、製薬部門の Barroughth Wellcome に属する The Museum of Pharmaceutical Science には、社員の研修用に使われる視聴覚教材があり、例えば循環器の机に座れば、循環器の構造、生理、疾病、治療に用いる薬物等が、数時間でスライドや音声によって理解できる仕組みになっている。製薬会社だけでなく、大学などの学生用にも応用できる教育方法の一つであろうと思われた。

館長の Sizer 氏の話では、アフリカや中近東や東南アジアは、昔、英国の植民地があった関係で、いろいろの史料を持っているが、日本についての史料に乏しく、ぜひとも今後は内藤記念くすり資料館と協力して史料の交換をして欲しいとのことであった。

II イギリス Royal College of Surgeon's Museum

Lincoln's Inn Fields にある王立外科医師会博物館を訪問、館長の J. Dobson 女史の案内で見て回った。これは医師用の博物館で、英国の医師が活躍した世界各国——特に英国の植民地だった国々——から持ち帰った標本の博物館である。人間はもとより、象や牛などの数多くの標本が集められている。日本の大学の医学部の標本室を大型化したと思えばよい。何百年前に用いられた人間の血管だけを取り出した標本とか、ミイラとか、奇型児とか、めずらしい疾病のある臓器とか、あるいは古い手術用具とかが陳列されている。お医者さんには一回見ておかれたらよい博物館だと思う。

III イギリス The Museum of the Pharmaceutical Society of Great Britain

これは博物館というよりも、薬剤師会の会館の応接間や階段に、古い薬壺や歴代の会長の肖像画や薬剤師の歴史を展示したものである。

IV オランダ Amsterdam Medisch

Pharmaceutisch Museum

アムステルダムの Koestraat にあるアムステルダム市立医薬博物館を訪問、館長の Wittop Koning 博士の案内で見て回った。

この博物館は19世紀にオランダ市の医師会および薬

剤師会から寄附されたもので、現在は市の所有となっている。従来、市立博物館の一部に展示されていたが、建物の工事および見学者が少ないために、現在の場所に移転した。しかし近々新しいビルができるので、移転して、近代的な展示方法にしたいとのことである。

古い建物で、しかも仮住いなので、展示物が所狭しと並んでいる。ただ、世界最初的人工腎臓(木製)とかジェンナーが種痘に用いたメスとか、医学関係、薬学関係には面白い展示物があるが、いずれも骨董品的なものである。オランダやベルギー各地方の Apotheek の調剤室や実験室がそのままの姿で保存されている。

なお、われわれが日本から行くというので Koning 博士は昔、オランダが日本に薬を売ったときに用いたラベルの複製したものを記念品としてくれた。

V スペイン Muses de la Farmacia Hispana

マドリッド大学薬学部付属薬学博物館を訪問、同大教授、G. F. Jou 博士の案内で見学した。

米国薬史学会の会長から、ぜひともここだけは見てくるとのすすめがあったが、訪ずれてみて非常におどろいた。日本ではこのマドリッド大学の薬学博物館は、余り話題にならないが、おそらく、陳列品数、内容、規模において、こと薬局関係の史料においては世界最大のものではないかと思う。

スペインの昔の錬金術盛んなころの実験室から植民地時代を含めたスペインの薬局が現物のままで保存されており(4室)、さらに薬壺、天秤、製剤器その他、薬に関するあらゆる史料が、大講堂の中に数多く陳列してある。薬学部の学生に薬史学を教えるためのもので、一般にPRされていないために知られていないとのことである。たとえ入場料を取っても、参観者が来るほど立派な薬史館である。薬学部の付属施設として、これほどの史料を持っているところは、欧米にもその例がないと思う。ここでは、薬壺も数え切れないほどあるが、学生にも、どれが本物でどれが偽物であるかなども教えているとのことである。

この薬史館は、案内してくれた G. F. Jou 博士の父君が、やはりマドリッド大の教授であったときに設立されたもので、親子二代にわたり、薬史学の教授として集積、完成されたものである。

日本と余り交渉がなく、日本の薬史料が少ないのでぜひ今後は史料を交換していきたいとの希望が出された。スペインは英語を話す人が少ないので、日本人で

ここを訪ずれる人は少ないらしいが、薬史学に興味のある方でマドリッドを訪ずれる方は、ぜひともこの薬学部付属薬史館を訪ずれることをおすすめする。

VI スイス Schweizerisches Pharmazie— —Historisches Museum in Basel

バーゼル大学薬学部付属のスイス薬史館を訪問。一般には公開されていないが、さすがに製薬都市だけあって陳列物は他の薬史館と異なったものがある。建物も小さく、展示物もさほど多くはないが、製薬の歴史が年代順に展示されているので、見学者にとってはわかりやすい展示方法になっている。ただ一般公開用ではないので、ほとんど説明がない点が物さびしい。

人肉が薬だと信じられていた時代、ミイラや人間の油や死人からとったエキスが病気の治療に役立つと信じられていた時代、蛇や鳥のミイラが効くと信じられていた時代、薬草の時代、宝石類が効くと信じられ、これらを粉にして飲んだ時代、銅、鉄、金属などの鉱物や合成薬、抽出薬に移っていく時代が、史料によって陳列されている。ここで特に素晴らしいのは丸薬、いわゆる錠剤のコレクションである。パリの蚤の市はいうに及ばず、長い間かかって世界中から集めたものことであるが、16世紀ごろからの錠剤が数多く集められている。領主の家紋を刻印した10円金貨を5枚ほど重ねた古い錠剤から、何世紀も前の各種の形状の丸薬や錠剤が集められている。おそらく、錠剤の歴史に関する史料は世界一であろう。誕生石の起源が、たとえば4月ならば、ダイヤモンドをつけていれば病気が治ると信じられ、現在の薬と同じ意味で用いられていた名残りだと知ったのもこの薬史館である。

薬局というよりも、薬そのものの発達の歴史の史料を集めたのは、さすがに薬の都だけのことはあると思う。

VII ドイツ Deutsches Apothekermuseum

ハイデルベルグ城内薬史館を館長の Werner Luckenback 博士の案内で見学した。

ハイデルベルグ城内薬史館の通称で知られているこの薬史館は、よく宣伝されており、ハイデルベルグ城という古城に展示されているので、観光場所としては訪ずれる人が多いと思う。

この薬史館は、ハイデルベルグ城の一部を市から借りて展示しており、運営に要する費用は入場料と財団その他からの援助で経営している。このドイツ薬史館

は、1937年に設立され、翌1938年にミュンヘンで閉館したが、1944年に戦災を受け、ハレベルグに移った。その後1957年に今のハイデルベルグ城内に移転した。

現在の展示物のうち、35%のものは設立時に持っていたものであるが、残りは順次寄付または買い足したもので、展示物のうち8割が寄附によるもの、2割が買い取ったものとのことである。ドイツ薬史学会の全面的な援助のほかに、各国の薬史学会とはできるだけ連携している。記念くすり博物館とは、今後、展示物の交換を行なっていきたいとのことである。

VIII フランス La Faculté de Pharmacie de Paris

パリ大学薬学部長 Pierre Malangeau 博士と教授 Georges Dillemann 博士を訪問、ここで特に立派なのは、生薬の標本室である。世界各地から集められた生薬の標本が約2万5千種ほど展示されている。日本の生薬の中には木村雄四郎博士から寄附されたものもある。国別（生産国、使用国別）、用途別（適応症別）に系統的に整理分類して保存、展示してある。

なお両博士は、フランス薬史学会はもちろん、世界薬史学会の重要メンバーでもあり、内藤記念くすり博物館もこれら薬史学会のメンバーに加入することをすすめられ、加入した。各種の薬学史料の交換を強く望まれた。

IV フランス Musée l'Assistance Rublique à Paris

休日ではあったが、パリ慈善病院 附属博物館を Pierre Pignard 博士の案内で見学した、ナポレオン時代に貧民救済のための施療院として建てられた病院の建物が、現在は医学薬学歴史館として使用されている。ナポレオン時代から古い医療用具など、施療院で使われていたものが数多く集められている。あいにく修復工事中で全部を見学できなかった。現在はパリの医師会が経営する Hôpital de Paris の付属施設となっている。

X アメリカ Philadelphia College of Pharmacy and Science

フィラデルフィア薬科大学を訪問、学長の Arthur Osol 博士自ら、いろいろな史料や施設を案内してくれた。

1821年創立という、米国では歴史ある薬科大学だけに、研究用に用いられた史料が保存されている。同校

の名称は、最初は Philadelphia College of Pharmacy であったが、薬学だけでは薬のことは解決できないというので、医学、化学、生化学その他の講座を増設拡充し、特に医学方面の教育にも力を入れているとのことである。さらに Pharmacy だけではダメというので、校名も Pharmacy and Science と変更したとのこと。

現在は日本人の留学生がいないが、ここを卒業した日本人も多く、今後、日本の薬科大学ともいろいろ交流していきたいとの学長の希望があった。

XI アメリカ Stabler-Leadbeater Apothecary Shop

バージニア州アレキサンドリアにあるスタブラー・リードビーター薬局を訪問。1792年に建てられた古い薬局で、現在は薬局は経営していない。昔の米国の Apothecary をそっくりそのまま残してある。

XII アメリカ Smithsonian Institution

ワシントンにあるスミソニアン健康歴史館を訪問した。Smithsonian Institution は国立博物館ともいわれ、米国最大の博物館であり、あらゆる種類の博物館が集まっている。その一つに Museum of History and Technology があり、この一部に Hall of Health と呼ばれる展示場がある。館長の Sami Hamarneh 博士の案内でつぶさに見て回った。

医薬、薬学、医薬品、保健衛生の4部門から成り、おそらく陳列方法においては世界にその類を見ないと思われる。

一般に、医薬歴史館といわれるものは、古いものを数多く陳列しているにすぎず、一見骨董屋的な趣味から抜け出せないものであるが、ここでは一般大衆や医学生、薬学生に医薬の歴史、薬学の歴史、医薬品の歴史、公衆衛生や保健の歴史を教えるためにつくられており、一巡すればそれぞれが一通りおぼえられるようになっている。例えば、医薬品の部分では、草根木皮の時代から現在の合成薬までの歴史が一つのショウウィンドウにまとめられ、抗生物質の展示棚には最初にイギリスでペニシリンをつくったときの製造機から現在の大型の製造機までが、また最初のペニシリンの現物から現在の各種の抗生物質の種類までが、それぞれ時代順に系統的に現物と図表を使って展示されている。

Sami Hamarneh 館長から聞いたところでは、実際に展示されているものは史料のうちの何十分の一にすぎ

ないとのこと。史料のうち15%が博物館が買い取ったもので、残りの85%は一般から寄贈されたものとのことである。

展示は永久展示、臨時展示、特別展示の3種に分け、3年、4年、5年の周期で内容を変えとのことである。他の都市での展示会（例えば医学会、薬学会など）の展示にも貸出すことはあるとのこと。

一般大衆ばかりでなく、米国の医学生、薬学生が勉強に来るし、外国の医師団や薬学関係者も団体で見学に来、そのあと講義を受ける人も多いという。

XIII アメリカ Hook Drugs Historical Shop

インディアナポリスにあるフックドラッグ薬局歴史館を訪問。フックドラッグ社 (Hook Drugs, Inc) の創業期の古い店そのままを新築したものである。昔の調剤室などはそっくりそのままであり、陳列してある薬も昔のものがそのまま置いてある。店の半分は売店になっており、ストーブからコップまで昔の形でそのままのものを作らせて使っている。売っているタバコもキャンディも、石鹸も、30年前、50年前のものを作らせて売っている。コココーラを注文しても、発売最初の頃のタル詰めスタイルで売っている。われわれが50年前緑日を買ったようなアメや駄菓子も売っている。

前述の Stabler-Leadbeater が開拓期の Apothecary の典型を示すのに対して、これは米国の開拓期の drug store というものがどんな姿でどんなものを売っていたか一見でき、おもしろい。

XIV アメリカ International College of Surgeons

シカゴにある国際外科医師会の Hall of Fame and Museum of the History of Surgery を見学した。これは一般大衆、医学生、外科医に対して、外科の発展歴史を示して、外科についての知識の普及向上をはかるためのもので、加盟各国から寄贈された各国における外科の歴史を示す史料が展示されている。古いメスや絵画が展示されており、その国における外科の発達史がわかりやすく説明されている。

日本の間には華岡青洲の一代記が掛軸に画かれている。日本の医学薬学も相当諸外国には知られていると信じているが、私達が回った医学薬学関係の博物館においては、わずかにこの華岡青洲の資料だけが日本の資料として展示されていたにすぎないのは、ややさびしい気がした。

XV アメリカ Museum of Science and Industry

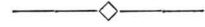
シカゴの科学産業博物館を訪問、館長以外の案内で2日間にわたって見学した。スミソニアンと肩を並べる博物館であるが、他の博物館と比べて著しく異なるのは、他の博物館がどちらかというと、過去の歴史を展示しているのに対して、ここは過去の姿も展示しているのは当然であるが、科学と産業について現在と未来を示しているものが多いことである。しかし現在の状態について視聴覚にうたえる方法で、一般大衆にもわかりやすく説明している。この展示方法はわれわれの博物館の展示方法にも参考になるものが多い。現在日本各地にある「科学館」は、ここをモデルにして作られたものが多い。

この科学産業館展示物のうち博物館自体のものは10%ぐらいで、各産業のメーカーまたは業種別協会が残り半分を、さらに軍関係が半分をと、それぞれに会場を貸与する方式である。

各企業体（会社、協会、財団等）とも、過去のことは余り触れず、現在の姿と将来の予想を示すことに力を入れているので、入場者には興味深い展示となっている。

医薬関係部門では、アボット社、軍関係、薬学医学

の財団などから出陳されており、妊娠、小児マヒ、外科手術、医学の重要性、薬学その他の各部屋に映画やスライド、グラフなどがボタンを押せば現われるという、素晴らしい展示テクニックを用いて出陳している。いずれも各分野について、一般大衆の教育を中心としたものが多い。



概して、ヨーロッパの博物館は古いものが多く、過去のものを展示して、どちらかというと懐古的な蒐集に重きを置いてあるのに対し、米国のものはこの他に、現在と将来の様相についても示唆を与え薬業薬学関係者だけでなく、一般大衆のこれに対する正しい理解と知識の向上をはかる意図のものが多いという印象を受けた。

ただどこへ行っても日本関係の資料はほとんど見受けられず、日本の薬業は欧米各国では全く知られていないことを知った。しかし彼らは日本のことを知りたがり、そのために資料の交換方を強く要望された。

以上はこのたび歴訪した、公開された博物館についてのみ述べたが、この他に今回訪問した著名の製薬会社はそれぞれ私的な展示場を持ち、その社の創立から現在に至るまでの諸資料を分かりやすく展示しているのを見たことを附記しておく。

編 集 後 記 (Editor's Note)

去る6月12日岐阜県川島町の内藤記念館に内藤くすり資料館が創設された。木曾川の清流に囲まれた静かな環境であり、ほぼ濃尾の中央に位置するが、たまたまわが国本草学の先覚者、飯沼慾齋は美濃大垣から、また伊藤圭介は尾張、名古屋の出身であり、更にまた近世薬学の先覚下山順一郎（犬山）柴田承桂（名古屋）を輩出するなど歴史的にも洵に因縁浅からぬ土地柄である、

日本薬史学会はわが国最初の内藤くすり資料館の開館に協賛して翌13日同館で記念講演会を開き、飯沼慾齋、伊藤圭介の業績を称え、併せて加賀百萬石の城下に伝わる由緒深い加賀の秘薬の紫雪や混元丹などに関する門外不出とされた資史料が出品展示され、来賓並びに会員など約300名を迎えて盛会であった。がこれひとえに演者並びに出品者各位のご協力の賜ものである。

飯沼慾齋〔(天明2年(1782))~慶応元年(1865)]については嶋野武氏の講演に詳しいが、名著『草木図説前篇』はわが国で初めてリンネの植物自然分類体系に従い、わが国に自生する植物を科学的に分類し図説したものであった。すなわち初版は『草木図説前篇』と題し草部20巻4冊で回に分けて出版〔(11—5巻(安

政3年,) 6—10巻(文久元年), 11—15巻(文久元年), 16—20巻(文久2年)]された, 時に惣齋は75—77才であった。

前篇には別に木部10巻10冊が予定され, 後篇には菜部, 穀部, 水草部, 羊歯部, 禾本部, 莎草部, 芝部, 蘭類, 果部など10巻10冊に相当する未完の草稿が現存しており, 私はこの春, 岐阜薬科大学の水野氏の案内で飯沼家の親戚である江崎美奈子(岐阜県本巣郡南村美江寺)氏を訪れて親しく秘蔵の草稿を拝見したが未発表の草稿を何とか刊行する機会を得たいものである。

次に伊藤圭介〔享和3年(1802)～明治34年〕についても吉川芳秋氏の講演で事績のあらましを知ることが得たが, とりわけ名著『泰西本草名疏』3巻3冊は文政12年たまたまシーボルトから貰った Thunberg : *Flora japonica* (1784) の植物に和名と漢名とを当て, リンネの植物分類法による24綱を紹介したもので年齒わずかに27才であった。このほか『救荒食物便覧』[(天保12年(1837))]『嘆咄喇種痘奇書』(天保12年(1837))『暴瀉病手当素人心得』文久3年(1863)など多彩な啓蒙書を刊行し, また安政5年(1856)には内外の植物を移植培養して旭園と名づけ, ここで尾張の本草会として知られた警百社の会合が開かれた。現在地の名古屋市室町3丁目12番地がその跡地であるといわれる。出品展示された伊藤圭介の資史料は吉川芳秋氏並びに名古屋東山植物園のご好意によった,

なお加賀藩の秘薬については三浦孝次氏の講演に詳しく資史料の展示は頗る好評で注目された。終りに, アメリカのスミソニアン, インスティテュウション医薬部長サミ・ハマネ博士は, くすり資料館の開館式記念講演会で, ならびに翌日の日本薬史学会記念講演会で, それぞれ講演を行ない, またアメリカ薬史学会からの祝辞を述べられたが, 講演内容については改めて記録したい。ここに記念号を特輯するに当り聊か所感を述べ協力された各位に厚く御礼を申し上げる,

(日本薬学史学会常任幹事 木村雄四郎)

日本薬史学会総会 (45年度)

日本薬史学会第71年会は、昭和46年4月7日から9日までの3日間にわたり、開催地福岡市で開催されたが、薬史学部会は第3日の9日、9題の研究報告を行なった。午前の部を終り、午後1時～1時30分に総会を開き吉井（千代田）常任幹事から下記会務報本に併せ、会計報告を行なった。なお会計報告については赤須（通美）幹事の監査報告があった。

（会務報告）

まず44年度、45年度における物政会員（7名）、高橋真太郎、樋 彰一、三宅馨、青木 大、志幸達三（商店）、林四郎、武田孝三郎の諸氏に対し黙禱をささげて弔意を表した。45年度末、

現在会員数 199名、内会費納入者 110名、

幹事更迭 （新任）滝戸道夫、長沢元夫、難波恒雄

（退任）三堀三郎、石坂哲夫

雑誌発行 第4巻第2号、第5巻第1号なお予て申請中であった「學術雑誌」認可は雑誌編集に対し、広告掲出によって協賛されたのは、武田薬品工業株式会社、ユーザイ株式会社、山之内製薬株式会社、株式会社広川書店、平安堂薬局である。

年度内に開催した薬史学集談会は3回。

第90年会における薬史学部会は、開催地札幌市において、45年7月28日、研究報告5題のほか、シンポジウム「比較民族薬物論」を行なった。

この総会の席上、46年6月12日に開催予定の“くすり資料館”の創設に協賛し、翌6月13日、日本薬史学会記念講演会を開催することを予告し、了承を得た。

昭和45年度決算 (45.1月—45.12月)

収 入 の 部	568,599	
繰 越 金	114,160	
会 費 賛 助	30,000	(6名)
一 般	102,000	(102名)
学 生	1,000	(2名)
広 告 料	200,000	
雑 誌 売 上 代	9,000	
寄 付 金	110,000	(清水藤太郎氏、赤須通美氏)
利 子	1,139	
雑 収 入	500	(集誌公残金)
支 出 の 部	557,316	
郵 送 料 他	18,220	
事 務 費	8,710	
会 費 印 刷 費	530,386	(第4巻1～2号及各200部別冊代を含む)
差 引 残 金	11,283	

(以上昭和46年4月学会総会報告事項)

日本薬史学会会則

第1条 本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける。

第2条 本会は薬学、薬業に関する歴史の調査研究を行い、薬学の進歩発達に寄与することを目的とする。

第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 総会（毎年日本薬学会年会の時に行う）
2. 例会（研究発表会、集談会）
3. 講演会、シンポジウム、セミナー、その他
4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行。当分の間年2回とする。
5. 資料の収集、資料目録の作製。
6. 薬史学教育の指導ならびに普及。
7. その他必要と認める事業。

第4条 本会の事業目的に賛成し、その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする。

第5条 本会の会員は会費として年額1,000円を前納しなければならない。但し学生は年額500円とする。賛助会員は本会の事業を協賛する人または団体とする。賛助会員は年額5,000円とする。

第6条 本会に次の役員をおく。会長1名、幹事若干名、評議員若干名、役員の任期は2カ年とし重任することを認める。

1. 会長は総会で会員の互選によって選び、本会を代表し会務を総理する

2. 幹事は総会で会員の互選によって選び、会長を補佐して会務を担当する。

3. 幹事中若干名を常任幹事とし、日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する。

4. 評議員は会長の推薦による。

第7条 本会に事務担当者若干名をおく。運営委員会は会長これを委嘱し、常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる。

第8条 本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる。

第9条 本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる。

第10条 本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする。

第11条 本会の年度は暦年（1月より12月まで）、とする。

第12条 本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台 日本大学理工学部薬学科内におく。

日本薬史学会役員（昭和41年3月現在）

○印は常任幹事

会長 朝比奈泰彦

幹事 赤須 通美 三浦 三郎

石坂 哲夫 三堀 三郎

○木村雄四郎 根本曾代子

清水藤太郎 ○吉井千代田

（地方） 高橋真太郎 木村 康一

宗田 一 塚本 起夫

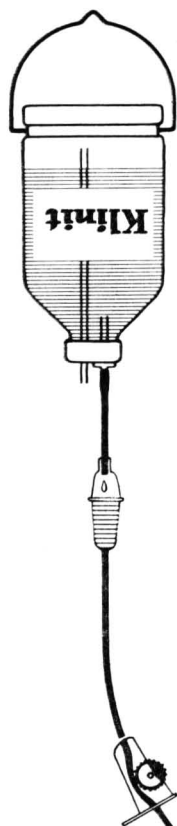
エネルギーを効率よく補給する

新しい糖質

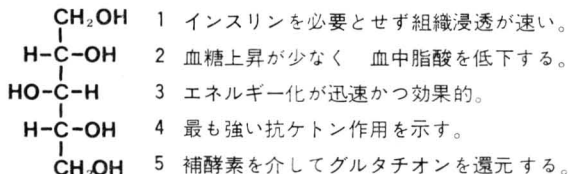
Klinit

クリニットは五価の糖アルコールのひとつ
Xylitol で、解毒の経路として知られるウロ
ン酸経路の正常な中間代謝産物です。

エネルギー補給に適しているばかりでなく
特異な作用が各科領域で賞用されています。



クリニットの特長



クリニットの臨床応用

糖 尿 病	アチドージス・昏睡の治療と予防、糖尿病患者の術前・術後の糖質補給
肝 疾 患	肝疾患輸液のベースとしてエネルギー補給 解毒の促進・生合成の促進・肝機能の改善
小児科領域	自家中毒症・新生児遷延性黄疸
外 科 領 域	麻酔・手術侵襲によるアチドージス防止、術 後代謝異化相における糖質補給、アミノ酸の 併用輸液として同化促進
抗癌剤の作用増強・副作用防止	
ステロイド長期投与による 副作用防止	

健 保 適 用

収 載 名	規格包装	薬 価
クリニット注 5%	500ml 1バイアル	730円
クリニット注 10%	500ml 1バイアル	1,000円
クリニット注 10%	20ml 1アンプル	68円

(昭和47年2月1日実施)

エーザイ株式会社

東京都文京区小石川4丁目